

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第15回東邦大学医療センター大橋医学会
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(2). p.94-97.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD69671138">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD69671138</a>

## 第 15 回東邦大学医療センター大橋医学会

令和 5 年 7 月 20 日（木）17 時 00 分～19 時 00 分

令和 5 年 7 月 21 日（金）17 時 00 分～19 時 00 分

東邦大学医療センター大橋病院臨床講堂

7 月 20 日（木）

## 一般演題 I

座長 高橋 啓

## 1. 術前術後評価および経過観察にエコーが有用であった左椎骨動静脈瘻の 1 例 A case of left vertebral arteriovenous fistula

藤崎 純, 金子南紀子, 佐々木有沙, 来住野雅, 高橋奎太, 長谷川碧海（臨床生理機能検査部）  
藤田 聡, 中山晴雄, 林 盛人, 岩渕 聡（脳神経外科）  
諸井雅男（循環器内科）

【症例】20 歳代 女性。【既往歴】なし【現病歴】20XX 年 6 月, チアリーディングの練習中に転落し左後頭部を打撲した。頭痛やめまいが継続するため翌日当院脳神経外科外来を受診した。意識清明であるが左上下肢麻痺を認め、精査加療目的に入院となる。CT, MRI 検査にて、左椎骨動脈の著明な拡張および静脈への連続性が疑われた。脳血管造影検査にて、左椎骨動脈から静脈へのシャントが確認され、外傷性左椎骨動静脈瘻と診断された。【術前超音波検査】左椎骨動脈の血管径は 10 mm と著明に拡張していた。末梢部では限局的な乱流を認め、収縮期最高流速は 439 cm/s と高速血流を認めしたが、乱流部の血管は蛇行しており、さらに深部を走行しているため詳細な観察は困難であった。乱流部より中枢側、頸椎間にて血流量を計測すると 1,874 ml/min であった。大後頭孔アプローチでは左椎骨動脈末梢部では逆流していた。【カテーテル治療】左椎骨動静脈瘻に対してコイル塞栓術が施行された。シャントは完全閉塞には至らなかったが、シャント血流は著明に減少した。【術後超音波検査】術翌日、左椎骨動脈の血管径は 8.1 mm、頸椎間での血流量は 748 ml/min であった。大後頭孔アプローチでは左椎骨動脈末梢部の逆流は残存していた。術後 7 日目、左椎骨動脈の血管径は 6.6 mm、頸椎間での血流量は 135 ml/min であった。大後頭孔アプローチでは左椎骨動脈末梢部の血流は順行性へと変化していた。術後 60 日目、左椎骨動脈の血管径は 3.8 mm、頸椎間での血流量は 95 ml/min であった。同時期に施行された脳血管造影検査では左椎骨動脈から静脈へのシャント血流は消失していた。【結語】椎骨動静脈瘻の術前術後評価および経過観察にエコーが有用であった。

## 2. DOAC（direct oral anticoagulant）内服中に発症した脳出血に対して Xa 阻害剤を使用した 1 例

塚本匠真（1 年次研修医）

指導：藤田 聡, 平元 侑, 小屋原優輝, 佐藤 詳, 傳 和真,  
平井 希, 中山晴雄, 林 盛人, 齋藤紀彦, 岩渕 聡（脳神経外科）

74 歳の男性。右麻痺、失語で前医に救急搬送された。GCS（Glasgow Coma Scale）8、左被殻出血の診断で当院へ転送となった。当院来院時 GCS 5 と悪化しており瞳孔不同も見られ、頭部 CT で血腫が最大径 10 cm と拡大していた。心房細動に対しエドキサパンを内服しており、Xa 阻害剤（アンデキサネットアルファ）を用いて開頭血腫除去術を施行した。血

腫はほぼ全摘され、術後の再出血も見られなかった。抗凝固薬は第4病日からヘパリンナトリウム、第7病日からエドキサバンを再開した。

### 3. セフトリアキソン（CTRX）投与に伴い偽胆石を形成した高齢者の3例

服部陽介（1年次研修医）

指導：齋藤倫寛，齋藤孝太，枇杷田雅仁，岩井 哲，田島慎也，竹中祐希，山田悠人，日原大輔，岡本陽祐，塩澤一恵，伊藤 謙，渡邊 学（消化器内科）

CTRXの投与に伴い偽胆石と呼ばれる胆石様沈殿物が形成される事が知られている。今回我々は高齢者の3例を経験した。症例①は80歳台，男性，憩室炎。症例②は80歳台，女性，気管支炎。症例③は70歳台，男性，大腸炎。それぞれ3日間～7日間のCTRX投与後に偽胆石を認めた。症例①は経過観察のみで自然消失したが，症例②，③は胆石性膵炎を発症しERCP，胆管ステント留置を行った。CTRXに伴う偽胆石はCTRX投与中止により早期に消失する事から経過観察などの保存的治療が第1選択とされる。しかし，一部の症例ではERCPなどの治療を必要とする可能性があり，高齢者は偽胆石ができやすい可能性を十分に認識しておく事が必要である。

### 4. 急性期脳梗塞症例に対するCT灌流画像の有用性

藤田 聡，林 盛人，岩淵 聡（脳神経外科）

脳主幹動脈閉塞による急性期脳梗塞症例に対する急性期治療としてt-PA静注療法と経皮的血栓回収療法が推奨されている。一般的に脳梗塞の急性期診断は頭部MRI画像を用いることが多いが，当院ではCT灌流画像 Vitrea workstation (320列 Aquilion one, Canon medicalsystems) を用いて診断および治療方針を決めている。実際の症例を提示しながらCT灌流画像の有効性を報告する。

### 5. 組織型の推定に苦慮した oncocytic change を示す肺カルチノイドの1例

中村千秋，松澤優斗，湯浅瑛介，佐々木智子，村石佳重（病院病理部）

浅川奈々絵，大原関利章，横内 幸，高橋 啓（病理診断科）

気管支洗浄・擦過細胞診検体において，組織型の推定に苦慮した肺カルチノイドの1例を経験したので報告する。一般的な定型カルチノイドはロゼット様配列にみられるような緩い結合性を示し，淡く比較的乏しい細胞質を有することが多いとされる。本症例は孤立散在性で結合性の全くみられない細胞や結合性の強い集塊が目立った。また，細胞質は好酸性で広く厚みがあり，顆粒細胞腫やoncocytomaとの鑑別を要した。

## 総研部報告

座長 小倉剛久

### 1. 川崎病類似血管炎マウスモデル心基部大動脈における Syk 阻害薬の血管炎抑制効果についての検討

浅川奈々絵，大原関利章，横内 幸，高橋 啓（病理診断科）

Candida albicans 細胞壁成分を用いた川崎病血管炎マウスモデルでは，Syk-CARD9 経路が血管炎発症に関与する。本モデルに3週間 Syk 阻害薬を投与すると血管炎が抑制されることを以前に報告した。本モデルの大動脈弁基部の炎症の経時的な変化と，各時期における Syk 阻害薬の血管炎抑制効果について検討した。【材料・方法】血管炎誘導後1日より Syk 阻害薬を連日投与した。1日，1週，3週で心基部を採取し，汎血管炎発症率，炎症の重症度，広がり，面積を評価した。【結果】1) 1日時点で汎血管炎を認めた。面積は1日と比較し1週で有意に拡大した。2) 治療群の1，3週時点で血管炎抑制効果が優位に示された。【要約】 Syk 阻害薬は治療開始早期から本モデルの血管炎発症を抑制した。

### 2. Guillain-Barré 症候群モデルラットに対する抗活性酸素療法

紺野晋吾（脳神経内科）

Guillain-Barré 症候群 (GBS) は，末梢神経系障害を起こす自己免疫疾患で，現行の治療法は免疫調整療法とリハビリテーション療法である。予後は重症度により異なる。ラットモデル（実験的自己免疫性末梢神経炎）を用いた研究では，活性酸素種の増加が確認され，エダラボンや $\alpha$ -トコフェロールの投与が末梢神経内の活性酸素産生を抑制し，症状が軽減

することが示された。これらの結果は、抗活性酸素療法が GBS の新たな治療選択肢であることを示唆している。

7月21日（金）

## 研修医研究報告 I

座長 常喜信彦

### 1. 肺小細胞癌を原発巣とする転移性虹彩腫瘍が疑われた 1 例

柳原里帆（2 年次研修医）

指導：飯田莉与，柿栖康二（大森病院眼科）

80 歳男性。急性の左眼の霧視を主訴に当科受診された。stage IV の肺小細胞癌に対し当院呼吸器内科で化学療法施行中であり、診察で虹彩膨隆を認め、前房水細胞診の結果 class IIIa であったことから、転移性虹彩腫瘍が疑われた。加療開始したが、急性の視力低下、眼圧上昇、中心暗点を認めた。症例を通じて、ぶどう膜腫瘍についての考察を行った。肺小細胞癌の虹彩転移が疑われた症例を経験したので報告する。

## 一般演題 II

座長 中山晴雄

### 1. 直腸癌術後の難治性縫合不全に対して Over-The-Scope Clip (OTSC) による瘻孔閉鎖を施行し、成功した 1 例

佐藤二郎（外科）

直腸癌術後の縫合不全は重篤な術後合併症の 1 つである。今回われわれは、腹腔鏡下低位前方切除後の縫合不全に対して Over-The-Scope Clip (OTSC) により瘻孔閉鎖し得た 1 例を経験した。症例は 86 歳女性で、直腸癌に対して腹腔鏡下低位前方切除術施行した。術後問題なく経過していたが、術後 6 日目に 40 度の発熱、CT で腸管外に free air を伴う液体貯留を認め、縫合不全による汎発性腹膜炎と診断し、腹腔内ドレナージと回腸人工肛門造設術施行した。術後も炎症反応の改善を認めなかったため、術後 22 日目に内視鏡を施行し、吻合部背側に瘻孔を認めた。保存加療での改善を認めなかったため、術後 26 日目に OTSC 施行し瘻孔閉鎖した。OTSC 施行後、経過良好で術後 78 日目に退院となった。今回われわれは直腸癌術後の縫合不全に対して OTSC を用いた瘻孔閉鎖が有用であった症例を経験したため、若干の文献的考察を含めて報告する。

### 2. がん悪液質とアナモレリン塩酸塩の使用実態と有効性

今川貴仁（薬剤部）

【背景・目的】がん悪液質は進行性の機能障害をもたらし、著しい筋組織の減少を特徴とする複合的な代謝障害症候群と定義される。がん悪液質は、進行がん患者の 50-80% に認められ、体重減少、食欲不振などの症状を起し、治療に影響を及ぼす。アナモレリン（商品名：エドルミズ®）は日本初のがん悪液質に対する薬剤として 2021 年 4 月に発売となった。これまでがん悪液質に対して有用な治療はなく、効果が期待されている一方、投与に際しての条件が細かいため、適正使用にあたっては薬剤師も患者背景を把握する必要がある。そこで、当院におけるアナモレリンの使用実態を調査することを目的とした。また、外来化学療法室で面談を行った患者について、その効果（体重の変化量、食欲改善の有無）を検討した。【方法】① 2021 年 4 月から 2023 年 3 月までの期間において、アナモレリンが適正使用されているか否かを診療録より後方的に調査した。② 外来化学療法室で薬剤師、看護師と面談を行った患者について、体重の増減、QOL-ACD スコアのうち、食欲関連スコア（食欲、味覚、吐き気、やせ）の 4 項目を評価し、1 か月後の体重、食欲スコアいずれかが上昇した群を「効果あり」、それ以外を「効果なし」とし、比較検討を行った。【結果】調査期間中にアナモレリンが処方されていた患者は 44 例（男性 25 例、女性 19 例）であった。そのうち、適応外のがん種で処方されていた例が 2 例、適応外の Stage で処方されていた例が 3 例、6 か月前の体重不明例が 7 例、開始時の体重不明例が 5 例（上記の条件が重複している症例あり）確認でき、適正に処方されていたのは 44 例中 32 例であった。外来化学療法室で面談を行った患者のうち条件を満たした患者は 17 例（男性 10 例、女性 7 例）であり、「効果あり」群は 13 例、「効果なし」群は 4 例であった。【考察】

添付文書に沿った適正使用がなされていない症例も認めましたが、体重不明例も実際は、医師が口頭確認などで把握し診療録に記載していない可能性がある。薬剤師や看護師など医療チームで関わることで今後より適正なアナモレリンの使用を推進できると考える。今回、アナモレリンの効果が得られない症例が確認された。EPCRC（欧州緩和ケア共同研究）のコンセンサスではがん悪液質になる前の前悪液質段階での介入が推奨されており、より早期の介入によってアナモレリンの効果が得られるなどの知見も出始めている。効果が得られなかった症例も早期介入できれば効果が得られた可能性があると考えられる。今後、治療開始の適切な時期や、治療効果に関連する因子なども検討していきたい。

### 3. 下部尿路機能障害を有する壮年男性患者における自己導尿導入期の葛藤に関する研究

山崎尚子, 小野真由美 (看護部 外来看護師)  
澤田喜友, 関戸哲利 (泌尿器科)

【目的】清潔間欠自己導尿（以下ISC）は、心理的要因から約3割の患者が継続困難であり、導入期の教育や指導、適切な経過観察が重要であることが明らかになっている。特に壮年期男性では、社会的背景がアドヒアランスに影響を与え、CISCが継続できない一因となる。本研究では、壮年男性を対象として、CISC導入期の葛藤を明らかにすることを目的とした。【対象・方法】当院泌尿器科外来に通院中でCISC導入期の壮年男性患者3名に対し、半構造的面接法によるインタビューを実施し、質的記述的分析を行った。なお、葛藤の定義は「ISCを実践するために、自身の中で対立する事象が生じている状態」とした。【結果】葛藤に関する8のカテゴリーと112のサブカテゴリーが抽出された。壮年期男性患者は、【下部尿路機能障害により仕事と生活に影響が出る焦燥】を抱え、やっとの思いで泌尿器科を受診しており、ISCの告知を受けていた。導入期には【初回ISC時に体験する身体的苦痛】、【初回ISC時に実感する環境的苦痛】、【初回ISC時に抱く屈辱的な精神的苦痛】を伴いながら仕事と生活の両立を模索し、常に【CISCが仕事に及ぼす影響を懸念】していた。しかし【手技に慣れ症状からの解放と安堵】が得られており、【症状を悪化させたくない思い】を抱えながら受容し【ISCと仕事を両立させる懸命な生活再構築】を実現しようとしていることが明らかになった。つまり、ISCの導入期には、身体的・環境的・精神的苦痛がISCをやりたくない要因であった一方、ISCの継続に葛藤があると考えられた。【結論】本研究において壮年患者では、ISCが生活の一部になるように仕事や生活との両立に向けて試行錯誤していた。ISC導入期に患者個々の状況を踏まえた教育・指導を行い、患者のワークライフバランスや価値観を重視して、日常生活に組み込めるように患者と向きあうことの重要性が示唆された。

### 4. 腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術（TAPP法）を施行した再発鼠径ヘルニアの1例

橋本瑤子 (外科)

【はじめに】再発鼠径ヘルニアは初回手術に比べ再発や合併症をきたしやすい。近年では腹腔鏡手術での有用性が報告されている。【症例】76歳男性。2014年に左鼠径ヘルニアに対して、2016年に右内鼠径ヘルニアに対してKugel法を施行した。しかし2022年に右鼠径ヘルニアの再発を認め、虫垂が脱出していた。メッシュの癒着が強固であったがTAPP法にて修復をし得た。現在術後1年2か月経過し再発はない。【結語】再発鼠径ヘルニアに対してのTAPP法施行は腹腔内から再発状況やヘルニア内の状態を把握することができ有用であったと考える。

## 特別講演

座長 諸井雅男

### 寛解による生物学的製剤治療中止後の関節リウマチ再燃は予測可能か？

亀田秀人 (膠原病リウマチ科)

生物学的製剤をはじめとした分子標的療法の導入により関節リウマチの寛解率は向上したが、高額な治療の長期継続を回避する方策が必要である。我々は、2つの血中バイオマーカーの組み合わせが再燃予測に有用であることを見出したので、医療経済を考慮した個別化医療の観点から関節リウマチの最新治療戦略について考えてみたい。